

# 勇者がヒモに

なつたなら

著 ひーらぎ  
絵 杜崎ヨノモ



勇者がヒモになったなら

ひーらぎ

## 登場人物

● アルベルト・シュナイダー

本作の主人公。魔王を追ってアレボスから日本へ転移してしまふ。  
深雨と暮らすことになり、何もしない(させてもらえない)ヒモ同然の日常を送る。

● 水星深雨(みずほし みう)

本作のヒロイン。喫茶『雨宿り』の店長。常に笑っているような穏やかな性格。  
世話好きで誰に対しても優しい女神のような女性。彼氏を事故で亡くしてる。

● 桐花(きりばな) クシヤナ

雨宿りの常連客の一人。鮮やかな赤い髪が特徴でギャル系の顔立ちだが、中身はそのまま  
でギャルっぽくない。現在彼氏募集中。

●大鳥(おおとり) レイネ

雨宿りの常連客。左右で色の違うオッドアイが特徴。  
現在は深雨に紹介してもらった会社で事務員として勤務。その正体はアルベルトとは別の世界から転移してきた異世界人。エルフ。

●佐倉夕蘭(さくらゆら)

大学入試で失敗し、自殺しようとしていたところをアルトに助けもらった。  
それ以来ストーリーカーのように付き纏い、深雨から奪おうと企んでいる。

●ギブソン

アルベルトの仲間。浅黒い肌にごつい筋肉。  
スキンヘッドが特徴の神官。

●  
コトハ

アルベルトの仲間。むっちりした体型でかなりの巨乳。様々な魔法でアルベルトを支援する魔法使い。

# 1章 「たのしい? 勇者のヒモ生活」

1

ポロポロに擦り切れた赤いジャケットを纏ったアルベルトが途切れ途切れの呼吸を必死に繋ぎ止めて、聖剣メルクの切先を魔王の額へ突きつけた。

「追い詰めたぞ、魔王……ッ！」

「追い詰めた、か。そう見えてもおかしくないわね」

背中へ絡みつく鮮やかな赤い髪を肩の上でクスクス震わせた。病的に薄く、散る間際の白百合を思わせる双眼からは敗北の匂いを微かにも感じさせることはない。

そんな余裕がアルベルトヘトドメの一手を鈍らせた。このままメルクを数ミリ動かせば脳天を貫くことも容易いはずなのに。

アルベルトが緊張と背筋へ走る悪寒を誤魔化すように唾液を飲み込んだ。

脳天を突くよりも首を切り払ってしまおう、メルクを下段へ構えた。

それを見た途端、今にも殺されそうな魔王がカラカラ楽しげな笑い声を上げた。一瞬の動揺を見抜かれた気がして、アルベルトの頬へ冷たいものが伝った。

「なにがおかしい」

「早くあたしを殺せばよかったのって思っただけよ」

「早くもなにもお前はここで死ぬ」

「時間切れてことよ。さっさと殺しておけばよかったのに」

両肩を大きく露出させた改造修道服姿の魔王が、ストールで拘束された腕を持ち上げてパチン、と鳴らした。瞬間、彼女の背後へ簡単に人を飲み込んでしまえる大きさの異空間が出現した。どこまでも深い真つ黒な空間は見てるだけで不安感を煽られる。

全身の毛穴をこじ開けられそうな巨大な魔力反応は違う——アルベルトが瞬間的に脳裏へ過ぎった可能性を潰すべく、メルクを振り上げた。

薄青い炎を纏った右手にメルクが受け止められる。

「甘いわね。だからこうなるのよ」

「空間転移魔法……か。それもただの空間転移じゃないよな、それ」

「さすが勇者ね。そうよ、逃げるが勝ちとも言うじゃない？」

メルクを受け止めたままの右手の炎がより大きく揺らめいた。鼓動するように膨らんで、萎むを繰り返した炎が爆散。

咄嗟に後ろへステップ。アルベルトが魔力を注いだメルクで粉塵を払った。突風が巻き起こり視界が晴れる。

「それじゃあね」

魔王を包み止めた転移ゲートがその口を閉じ始める。

ここで殺り逃せば再びアレボスが壊滅の危機に陥るかもしれない。

アルベルトはなりふり構わず魔王へ駆け出し、辛うじて届くところへいる魔王へメルクを抜いた。

ひらひら散った修道服の布片へ舌を鳴らし、もう一步踏み込んで突き穿つ。しかしそれでも魔王へ傷一つ与えることはできなかった。

「行くしかないか……!!」

「アルベルトは完全に口を閉じようとしているゲートを睨み、唾液を押し込む。

「アルベルト!!」

後ろで魔王の軍勢と戦う仲間を順に一瞥し、

「行ってくる!!」

どこへ繋がってるかもわからず、生きて帰れるか、そもそも出て来れるかわからない暗黒空間へ飛び込んだ。

瞬間、前後左右、上下の平衡感覚が狂ったような気持ち悪さに襲われる。全身を押し潰すような圧迫感に嗚咽がこみ上げる。

世界から切り離されていく浮遊感に果たしてどれくらい続いただろうか。

地面へ投げ出されたアルベルトがゆっくり目を開けると——なんとということか。

「う、嘘でしょ……」

トンネルを抜けると、そこは見知らぬ世界だった。

どうやら民家へ転移したらしい。



木でできた床に、どうやって石を磨けばここまで光沢を抑えられるのか気になってしま  
う壁。そして見たことがない家財道具の数々。アレボスで目にしたことがない形式の民家  
内へ驚きながら、痛む身体をゆっくり起こす。

「ここは……。ま、魔王は……」

まだ転移のショックから回復できずにいるアルベルトが壁へ手を添えて、一先ず正面へ  
見える扉へ足を向ける。

「お、音……？ 水か？」

扉のすぐ傍で大量の水が溢れる音が鼓膜を触った。

もしかして魔王？

一度身構えはしたものの、そこからは魔王の気配も魔力も感じられない。となると、こ  
この住人ということになる。アルベルトが緊張感を吐息に変え、二つ並ぶうちの一つへ指  
をかけた。

「あのーすみませーん」

もわんもわん、湯気が押し寄せて視界がぼやけていく。お湯と石鹸が混ざった柔らかい  
香りへ閉じかけた瞼を持ち上げ直す。

「あの聞きたいことがあるんですけど——えっ!？」

あれっ!？ どうしてここに全裸の女性が!？ まさか、浴場!？

湯気の前へ現れた、薄栗色の髪を肌へ張り付かせた女性が何を意味するのか一瞬で理解  
したアルベルトが逃げるように回れ右。浴室を背中にする。  
しかし気になってしまうのが男の悲しい性。

おそろおそろ首だけを回してしまおう。

仄かに蒸氣した頬とぶつくりつやつやな唇が色っぽい、薄ぼんやりした幸薄の笑顔が可憐な女性と目が合ってしまった。可愛いより綺麗。嫌、そのどちらもバランスよく取り入れた顔立ちにはアレボスの姫様なんか目じゃない。

たゆんだゆんな胸元からずれたタオルも気にせず、じつとこちらを見つめる女性は何を考えているのか。いろんなところが見えて肌色全開な視界へこちらが恥ずかしくなり、アルベルトが一步、また一步と浴室から遠ざかる。

「え、えつと……ち、違うんです！」

「う、うそ……」

アレボス言語じゃない!? けど、この言葉は知ってる。

勇者になったときに聖剣と一緒に授けられたあらゆる言語を自分の知ってる言語へ変換する『言語理解』のスキルを使わずに、アルベルトが言う。

「嘘じゃないです。本当ですから!!」

必死に弁解しようとするもナイスな言い訳が一つも浮かんでこない。せめて距離を取って自分が無害であることを証明しようとするも——なんとということか、彼女から一步、二歩と近づいて来るではないか。

逃がす気はないってこと?

歩くたび幸せいっぱいに踊るおっぱいからは逃げたくないのですが……。

アルベルトの顔から精一の微笑さえ消え、ついに背中へ壁が触る。足の力が抜けて、壁伝いに尻餅をついた。

「やっと帰って来た……やっと、やっと帰ってきてくれたんだね……」

両目へいっぱいに涙を貯めた女性が目線を合わせるようにしゃがんで、こちらの素性を聞くこともなく当たり前前に抱き締めてきた。ポリウム満点、夢と希望で膨らんだ胸に顔が埋まりかける。

もう何が起きてるか理解できず、アルベルトの意識が彼女の温もりに絡め取られそうになる。それをなんとか踏み止まらせたのは、この状況のマズさからだ。

搾りかす同然の理性を夢中でかき集めて、彼女を押し返そうと必死に抵抗する。

「恥ずかしがらなくていいんだよ」

しかしこの女性、全く引く気がないらしい。いや、引かなくて結構。ここはきつと天国に違いない。男の夢と希望とロマンを集めた楽園、ああ生きてて良かった！！ って、そうじゃない！

「ど、どういうこと？」

「三年ぶりに帰って来て第一声がそれってどうかと思うよ」

困った風に吐息した女性に益々事態が飲み込めない。アルベルトが首を傾げた途端、ぷくつと頬を膨らませた女性に両頬を軽く摘まれる。

「彼女をほったらかして、あの約束は嘘だったの？」

彼女！？ この女性は何を言ってるんだ……？

これは自分が見ている夢か幻術か。

アルベルトが目尻を震わせながら、より強く抱き締める女性へ一旦身を任せた。「もう離さないから……アルトは一緒にいてくれるだけでいいの」

勇者がヒモになったなら (試読サンプル)

耳元を撫でる彼女の声へ、アルベルトは押し止めてきた溜息をついに吐き出した。  
——もうどういう状況だよこれ……。

勇者がヒモになったなら (試読サンプル)

『勇者がヒモになったなら』は夏コミで販売!

『よろづ屋本舗』

C90 コミックマーケット

3日目 8/14(日) 東5ホール パ - 41a

既刊『主役になれない彼女に捧ぐ』も販売予定!

※既刊と新刊をセットでお買い上げいただいた方には割引いたします!

# 勇者がヒモになったなら

発行者 よろづ屋本舗  
<http://yorodukatudousi.dou-jin.com>  
[yoroduyahonpo@gmail.com](mailto:yoroduyahonpo@gmail.com)

著者名 ひーらぎ  
<https://twitter.com/rag0311>

イラスト 杜崎ヨノモ  
編集 黒ねこ作(@gretelproject)

これはサンプルです。完全版ではありません。

本書の著作権は著者にあり、著者に無断で本書の内容の一部または全部を無断で複写(コピー)することを禁止します。

また、この作品はフィクションであり、実在する個人、団体とは一切関係ありません。